

I-3

大正期の都市空間形成過程における「造園」概念の誕生とその展開に関する研究 上原敬二により提唱された造園術(Pflanzung-Bauten)の設景手法と園囿的空間構造に着目して

Study on the birth and development of the concept of "landscaping" in the process of forming urban space in the Taisho era

About the landscape technique of landscaping (Pflanzung-Bauten) proposed by Keiji Uehara and the spatial structure of the Enyu

○須貝 仁¹, 田所 辰之助²

Jin Sugai¹, Shinnosuke Tadokoro²

In this study, in order to utilize the scenic knowledge of landscaping in the architectural design and planning system, the concept of landscaping lost in modern times is explored by regarding the academic system of modern landscaping in the Taisho era as a large modern merkmal. To clarify the technique and spatial structure.

1. 研究背景

近代造園家小沢圭次郎は、建築“設計”という技術営為に対して、“設景”と称した空間の総合的構成概念を提唱した。元来、建築とその周辺環境に関わる造園は両者に一貫した空間構成を具備する協働性を有していた。しかし、現代の建築設計・計画システムでは、造園家の職能領域は外構と修景に限定され、建築及びその景域に対する空間的関与は相補的には手掛けられていない。

本研究では造園の設景的知見が建築設計・計画システムに対しより包括的に活用されるべく、大正期における近代造園学の学知体系を近代のひとつのメルクマールと捉え、現代では見失われがちな造園の概念を巡って、その技法と空間構造の特質を明らかにする。

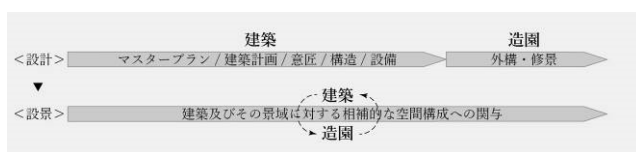


Figure 1. 設計から設景へ

2. 研究目的

従来、造園は庭園とは異なり、公園や緑地形成という意味合いに留まったものという認識が強く、建築と造園とを結び付けたものとしての評価は成されていなかった。本研究では、大正期における近代造園学が、建築を強く意識した学知的体系であると考えられる見地から、造園なる概念を巡り、その技法と空間構造を明らかにすることが目的である。その一環として本稿では、明治期後期から昭和初期にかけて発行された造園書(林学系・農学系・庭園系等)の論説・指針等に注目し、造園

界の動向や背景を体系化することにより、近代造園学の史的的位置付けと建築的側面からの再評価を行う。

3. 研究方法

大正期の近代造園学は、田村剛『造園概論』(1918)や上原敬二『造園学汎論』(1924)により学問的体系化が行われた。両者とも明治神宮造営に携わり、本多静六に師事している。本多はドイツ林学思想を近代日本林学へ転用し、近代日本造園学形成の契機を創出した人物である。このことから、①ドイツ林学思想の導入、②本多による日本的近代造園の萌芽、③田村・上原による学術体系化と三期に区分し、その変遷と造園の概念を明らかにする。また、造園界黎明期における到達点として、上原敬二の設景的知見を活かした実践的な技法や空間構造を分析し、建築及びその景域に対する空間的関与を明らかにする。

4. 本論

4-1. 十九世紀的なるものから二十世紀的なるものへ、近代メルクマールとしての造園学の誕生

近代造園家田村剛は、大正期を「欧米の精華を吸収した日本(中略)これからは“消化の時代”である」と述べた。大正期は国家の模索と形成を追い求め、十九世紀から二十世紀への転換が認められた時代である。その神髄となった出来事が明治神宮創建であった。

大正期における造園界(林学系・農学系・庭園系)の学術的議論とその発展は、造園界の社会的意義を確立し、帝都復興計画など都市形成過程に大きな影響を及ぼし、国家のナショナリズムの獲得に寄与した。大正期における近代造園学の学知体系を近代メルクマールの

1 : 日大理工・院(院)・建築 2 : 日大理工・教員・建築

ひとつと捉え、近代都市形成における史的位置付けとその価値を明らかにすることにより、建築的側面からの探求に価値が見出されるべきであると考えられる。

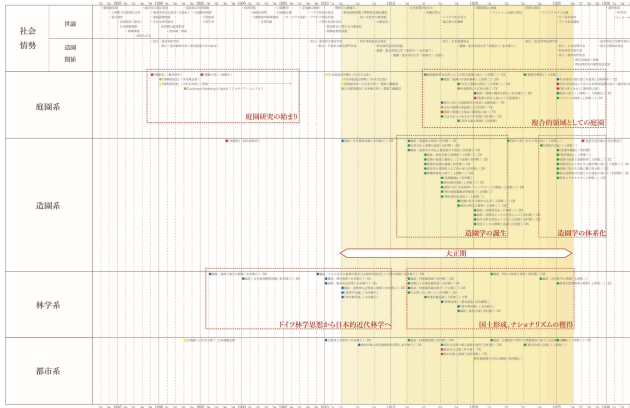


Figure 2. 大正期を中心とした造園系論説・書物等の年表

4-2. ドイツ林学思想から日本的近代造園学の展開

日本の近代造園学の展開の背景には、明治神宮林苑計画の中心人物である本多静六のドイツ林学思想「森林美学」があり、明治神宮造造営と造園学の形成に大きな影響を与えていた。ドイツ林学思想の変遷として、H・ザーリッシュ「森林美学」、K・ガイヤー「天然混合林の理論」、A・メーラー「恒続林思想」の3人が挙げられる。K・ガイヤーの後継者であるH・マイルは明治時代にお雇い外国人として来日したドイツ林学者であり、本多の師でもあった。

マイルに師事した本多の門下からは田村剛や上原敬二など近代日本造園学の学知体系確立の軸となる専門家が輩出され、ドイツ林学思想から日本的近代造園学の萌芽・開花・樹立が行われた。

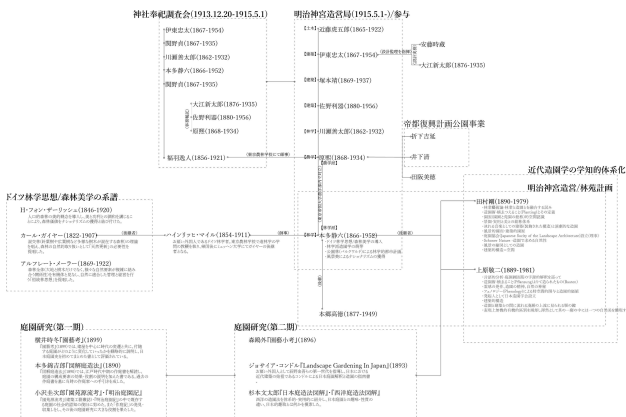


Figure 3. 林学派造園学の展開

4-3. 上原敬二による造園術(Pflanzung-Bauten)

上原は造園術について以下のように説いている。「庭園と云ふのは自然の風景を構成する處の要素を材料とし又は是れと藝術的建造物とを材料としてある法則の

下に配列し或る区域の内に主として具象的に理想化された自然又は建築的構造の體系である。(中略)此の精神は詮じ詰めれば植ゑること (Pflanzung) よりて造られたもの (Bauten) と云ふ簡潔明截な一言でつくる」。つまり、風景を構成する要素を植ゑ (Pflanzung)、建築的構造 (空間) を造ること (Bauten) であると読み取れる。上原は、造園的空間を建築的構造としてとらえ、空間を構成する手法として造園術を定義していた。

4-4. 園地的空間構造

上原は造園術の対象を園有的空間と定義している。園園とは園 (種が種ふる場) と園 (動物的習性や管理の便宜から樹木草石により区画構成された場) の複合体であり、庭園や公園とは性質の異なる空間性を包含している。以下、上原の字源的解釈を踏まえ、空間構造を分類する。



Figure 4. 上原敬二の字源的解釈を踏まえた空間構造の分類

5. 結論

近代造園学の学知体系の確立を近代におけるひとつのメルクマールと捉え、史的位置付けと建築的側面からの再評価を行うことにより、造園術や園有的空間構造など、現代では見失われがちな設景的知見を再評価することが可能であると考えられる。

- [1]本多静六：「森林美学」, 大日本山林會報, 第 326 号, pp. 4-10, 1910
- [2]上原敬二：「森林美学と造園術」, 大日本山林會報, 第 410 号, pp. 12-21, 1917
- [3]田村剛：「造園の起源と藝術としての造園」, 大日本山林會報, 第 413 号, pp. 15-23, 1917
- [4]上原敬二：「造園学汎論」, 林泉社, 1924
- [5]上原敬二：「人のつくった森」, 東京農業大学出版会, 2009
- [6]藤田大誠, 青井哲人, 他：「明治神宮以前・以後」, 鹿島出版会, 2015